

子どもたちと一緒に地域の活性化に貢献しよう！



吉井 厚志*

地域の活性化を応援するため、ちょっとした一歩を踏み出しました。ここに記して皆様のご意見を仰ぎ、できれば応援をいただきたいと考えています。

対象としている場所は天売島です。周囲12キロメートルほどの北海道の西に浮かぶ離島で、島民346人（2014年8月時点）が住んでいます。天売島は「海鳥の楽園」とも称され、8種100万羽もの海鳥が繁殖しています。絶滅危惧種のウミガラス（俗称オロロン鳥）の国内唯一の繁殖地としても有名です。

天売島では1960年代以降の慢性的な水不足と離島観光ブームで渇水が深刻化しました。ヘリコプターやフェリーで水を輸送したこともあったそうです。その後の治山事業による水源林の再生と地下水開発のおかげで、水不足は解消されました。この経緯については、1986年に北海道新聞に掲載された「森と水の話」（東三郎）でも紹介されています。島のエネルギーは、隣の焼尻島の重油燃料の火力発電所からの送電と、フェリーで運ばれる石油類などに頼っています。

2010年、私はこの地域の開発事業にかかわりながら、いわば究極の限界集落とも言える天売島の活性化のために何ができるのだろうか？と考え込みました。いくら開発事業を進め、インフラ施設を整備したところで、住む人たちがいなくなれば、意味がありません。

そこで、2010年には専門家と関係機関による現地調査を行い、議論を始めました。2011年には天売島で、北海道科学大学の岡村教授と石川県立大学の柳井教授による「島と海と森の話」というセミナーを開催しました。「森と水の話」や水源林再生のことを伝えていくことと、森が海にもたらす恩恵、そして豊かな森のあり方について、理解を深めてもらいました。

セミナーに出席していた天売小中学校の校長先生は、その内容を子どもたちにも伝えるよう依頼してきました。諸先輩のおかげで再生した森と海のことを次世代にも伝えたいという希望です。

そのような経緯で、2012年から天売小学校の「島と

海と森の話」授業が始まりました。寒地土木研究所、北海道科学大学、北海道立総合研究機構林業試験場、留萌振興局、羽幌町などの連携で進めています。

2014年9月24日の授業では、森と川と海の生物による物質循環を学び、望ましい森のあり方についても学習しました。そして、過密に育ち手入れの必要になったグイマツの林に入り、子ども達とノコギリで除伐を行い、ミズナラやオニグルミを植えてきました。

この活動は、今年度から留萌観光協会が獲得した、北海道開発協会の「地域活性化活動助成」の助成金で運営しています。活動の中で、除伐した樹木をエネルギーとして活用することも検討していきます。焼尻島からの電気と石油の負担を減らし、エネルギー自給率を高めることも目指します。試算によると、森の整備により除伐される樹木を薪ボイラーで活用すると、10数軒分のエネルギーが賄われ、燃料費は半分ぐらいに抑えられるようです。また、その作業のための雇用が創出されるというメリットもあります。

今回、「おらが島活性化会議」という島の有志の団体と相談をする機会があり、地域の方々とさらに連携を深めていくことになりました。小学校の授業と環境保全、島の方々の生活や水産物の加工にも繋がっていきそうです。まずは、除伐した樹木を整理し積み上げる作業を地域の方々の手で始めてくれるようです。

私は、地域の活力を高めるための技術開発やシステム作りの研究も、土木研究所のこれからの大事な役割だと信じています。2013年3月、土木学会が日本森林学会と日本木材学会と連名で発表した、「土木分野における木材利用の拡大へ向けて」において、木材利用技術、環境や景観、教育、分野横断的連携強化について提言されています。

今回の活動が、よりよい地域づくりのため、そしてそれを支える地道で幅の広い研究に活かされることを心から願っています。皆様も子どもたちと楽しむ継続的な営みに参加しませんか？

(独)土木研究所 寒地土木研究所 特別研究監*